

巫女バイト盗撮。柔肌晒す清楚系黒髪少女たち

今年も、またこの季節がやってきた。

私は代々神社の神主を務めてきた家で生まれた。

今は私が、神社の神主を務めている。

神社で一番忙しい時期は、新年が明けてすぐの、初詣の時期だ。

この時期には、毎年、巫女のバイトを雇って働いてもらっている。

巫女のバイトを務めるのは、全員が若い女の子たちだ。

近くの高校生か大学生がほとんどだ。

巫女のバイトに応募してくる女の子たちはみな、そろって、真面目そうな女の子ばかりだった。

もしかしたら元は、茶髪だったり、髪を染めていたりする子もいるのかもしれないけど、面接に来る子は、みんな黒髪の女の子ばかりだった。

真面目そうな黒髪の若い女の子が、この時期になると、たくさん私の神社にやってくる。

やましい気持ち起きないわけはなかった。

巫女の装束は、神社の物を着てもらっている。

巫女バイトの女の子たちは、私服で神社にやってきて、控室の和室で巫女の装束に着替えてもらって、仕事に就いてもらっていた。

着替えに使っている和室に、私は去年、隠しカメラを設置した。

置時計に模したカメラや、ゴミ箱の底に仕込んだカメラなど、和室の中に、5 台のカメラを仕込んで、女の子たちが着替える姿をいろんな角度から盗撮した。

最近、小型のスパイカメラがたくさん出回っている。

それを使ってみたのだが、思いのほかうまくいった。

バレることなく、女の子たちの着替え姿を盗撮できてしまったのだ。

私の神社では、年始の時期に、大体、10 人ほどの巫女バイトを雇う。

去年は、そのすべての女の子の着替えを盗撮することに成功した。

今年も、盗撮をやろうと思っていたけど、今年はさらに 1 つアレンジを加えることにした。

12 月の下旬。

今年の巫女バイトに採用した女の子たちが一堂に集まった。

今年、巫女バイトに応募があった人数は、19 人だった。

その中からブサイクな女の子は不採用にして、かわいくて真面目そうな女の子を 12 人採用した。

私の採用基準は、完全にルックス重視だ。

というよりも、着替えの様子を盗撮したい女の子かどうかだ。

ブスな子の着替えも見たいといえば見たいけど、やっぱりかわいい女の子の着替えを見て

みたい。

事前研修ということで、神社の講堂で私が12人のかわいい女の子たちに向かって話をする。「えー、それじゃあ、これから事前研修を始めます。研修といっても、説明のようなものだから、そんなに緊張せずに聞いてください」

私は、12人の若い女の子を前に話し始めた。一通りの仕事の流れや注意点、特に大事にしてほしいことなどを説明していく。

そして、今年から導入する下着に関するることについて話をする。

「去年は少しクレームがありました。それは巫女さんの下着についてです。少し言いづらいことなのですが、聞いてください。

実は去年、参拝客の方から、巫女さんの下着が派手な色で、透けて見えてしまっているというクレームがありました。

私はそのクレームを受けた後、その巫女の方に了承をとったうえで、確認させていただきましたが、確かに赤っぽいアンダーシャツのような下着を着ていたみたいで、巫女の装束の下に少し透けてしまっているようでした。

巫女さんのお仕事は、外回りの掃除のときを除けば、内勤になります。内勤だと、暖房もしっかりと稼働させているので、意外と熱くなります。

その方は、巫女の装束の下は下着だけだったみたいで、その下着の色が透けてしまっていたということでした。

私としては、クレームがあった以上、今年はそ

れに対する対応をしようと思っています。今年は、巫女の方々の下着の色は派手にならないように、白で統一させていただきたいと思っています。白だと透けることもないでしょうし、万が一透けてしまっていたとしても、不快感を与えるものではないと思います。参拝客の方々からクレームを受けることもないと思います。ですので、今年は皆さんにはそれを守っていただきたいのです」

私は話し終わった後、女の子たちを見回してみた。

少し戸惑っているような表情の子もいたし、それほど表情を変えずに聞いている子もいた。

「ただ、皆さんの下着の色を私が確認するわけにはいきませんから、ぜひ皆さんの中でお互いに確認し合うようにしていただきたいのです。巫女の方々は大体、同じ時間に出勤してきます。そのときに、あちらの和室で着替えていただくんですけど、その際に、皆さん同士で、他の方がちゃんと白の下着を身につけているかどうかを確認し合っていたいただきたいのです」

私はあくまで事務的に、仕事内容を説明する体で話し続ける。

「それで、もし白以外の下着を着ている方がいたら、その際は、神社の方で白の下着を用意しておきますので、そのことを私にお伝えください。白の下着をお渡しするので、それを身につけて仕事をしていただくかたちになります。でも、皆さんが普通に白の下着を家から着て

もらえれば、それでけっこうですので、ぜひ、ご協力をよろしくお願いします」

私が話し終わると、何人かの女の子は隣の子と顔を見合わせていた。

「何か質問がある方はいますか？」

私が女の子たちに問いかけると、1 人の子が手を挙げた。

「はい、ではその、飯田さんでしたよね。お願いします」

私はもうすでに女の子たちの名前と顔は、履歴書を見て、すべて頭に入っている。

近くの公立高校に通う、高校 2 年生の飯田瑞葉が話し始める。

「あの、私、白の下着とか持ってないんですけど、買わないとダメですか？」

私は一瞬、頭が真っ白になった。

でも、すぐに頭をフル回転させた。

「そうですか。そうですねえ、買っていたいた方がいいかもしれませんが、もし、仕事の日までに用意できなければ、そのときはおっしゃってください。さっき言いました、神社で用意する白の肌着をお渡しするので、それに着替えて仕事をやってもらうかたちになると思います」

「あ、あと、それって下もですか？ 下の下着も白ってことですか？」

飯田瑞葉が続けて質問する。

「そうですね。上下白でお願いします」

「わかりました」

飯田瑞葉はそう言った。

下の方は、赤い巫女の装束を着るので、透けることは絶対になかった。
それでも、統一感を持たせるために、上下白の下着に指定にしたのだ。

事前の研修会が終わった。
私は研修会の後、もしかしたら、辞退者が出るかもしれないと思っていた。
下着の色が指定されることを不快に、不審に思い、警戒感を高めて、仕事をしたくないと言ってくる子が出てくるのではないかと思っていた。
それを見越して、今年は去年よりは少し多めに採用していたけど、無事に全員が仕事に就いてくれることになった。

年始の忙しいときに仕事を滞りなくこなしてもらうために、12月下旬から、徐々に何人かずつで、短時間の巫女の勤務を始めてもらった。
私は巫女バイトたちが勤務を終えて帰った後、和室に仕掛けてある、盗撮カメラを回収し、動画を確認した。
巫女たちは、みんなきちんと白の下着を身につけてくれていた。
和室で着替えるときに、その純白の下着をカメラの前で晒け出してくれていた。
ほとんど白のショーツや、アンダーウェアのようなものを身につけている子ばかりだったけど、中には、白のブラジャーや、パンツを披露してくれていた女の子もいた。